

(研究ノート)

金沢星稜大学女子短期大学部における海外研修の参加状況と課題

Consideration of Study Abroad Participation amongst Kanazawa Seiryō University
Women's Junior College Students

辰 島 裕 美

Tatsushima Yumi

目次

- 1 国際交流の教育的意義
- 2 金沢星稜大学女子短期大学部の国際交流
 - 2-1 多彩なプログラム
 - 2-2 参加の人数と理由
- 3 韓国の協定大学との交流実践
 - 3-1 これまでの経緯
 - 3-2 2019年度留学生の受入
 - 3-3 星稜からテリム大学校への派遣
- 4 参加者の自然増に向けて

キーワード

海外研修, 国際交流, 海外協定校, 短期大学生, 多様性

1 国際交流の教育的意義

人は誰しもが、生まれ育った環境に順応していく。人間は社会性の高い生き物である。社会性とは、社会化していることで、無意識に周囲、つまり社会からの影響を受けながら、自己形成されると言える。しかし、自分とは異なる背景や価値観を持つ人々に出会ったり、異質な環境に置かれたりすると、思考や価値観が変化する⁽¹⁾。このことが、自分とは違う人を受け入れ、多様性を認め合い、尊重して良好な人間関係を持てることにつながる。このように、短期間であっても海外研修や国際交流といった活動では、学生にとって、これまでに知らなかった社会や自分を知るため、自己の変化や自身の成長を実感しやすい。著者はここに、教育的な意義を見出している。

本稿では、まず、2014年頃からの金沢星稜大学女子短期大学部における海外研修を中心とした国際交流活動の現状をまとめる。次に、事前事後の研修参加者との個人面談から、学生の声を紹介する。そして、2019年7月に留学生を受け入れた経験を振り返り、

今後の課題を提示し、対策を提案する。

2 金沢星稜大学女子短期大学部の国際交流

2-1 多彩なプログラム

短期大学生が参加できる大学の海外研修プログラムは多数あるが、現状は、1年次の夏休みの研修に参加が集中している。2014年からの6年間に大学から提供されるプログラムは、年々増加している。そのため、年度ごとの比較は難しい。2019年度に短期大学生が参加できるプログラムの一覧は表1の通りである⁽²⁾。

学生の海外派遣業務は、金沢星稜大学国際交流センターが主体であるが、正規科目では大学の4科目や、進路支援課が企画するプログラムなど目的や行先、活動内容などバラエティに富んでいる。これらの実稼働に、本学の際立っている点としてスタッフの力量が光っていることがあげられる。特に学生と頻繁に関わる進路支援課、国際交流課、教務課、学生支援課などのスタッフは個々人の熱意も強く、教員とも協力して大学全体で教育できている。

表1：短期大学生が参加できる海外研修プログラムと研修

1. ムーンショットアブロード	6. 団体企画海外研修
2. ほしたび	7. 協定校等主催短期研修
3. 語学研修	8. 短期海外実習
4. エリア・スタディーズ	9. 海外ボランティア
5. 個人企画海外研修	10. 海外インターンシップ

短期大学生に認知度が高いプログラムは次の3つである。最も人気が高いのが、ムーンショットアブロードである。これは1週間から最長4週間まで、希望に合わせて研修期間を設定できる、語学研修を中心としたフィリピンのセブ島でのプログラムである。現地教育機関の寮や宿泊施設での合宿である。近年では50～60名近い参加者で、希望者はそれ以上に上る。ほしたびはいわゆる洋上研修である。7日間の行程の往復が船などの交通機関で、その4泊の移動時間を利用してのグループワークなどの研修が目的である。行先は上海やウラジオストクであるが、現地では滞在が短い。エリア・スタディーズは、夏休みや春休みといった長期の休暇期間中に行われる10日程度の短期体験型プログラムで、アジア、北米、オセアニア、欧州など多彩な研修先を展開している。現地で大学や企業を訪問し、様々な体験して国際理解を深めたりすることが主な目的である。大学では授業に参加して学生同士の交流をはかり、企業では主に日本人の海外駐在員の生活や仕事の話を聞く。

短期海外実習は、「観光実習」や「ホスピタリティ演習」などの金沢星稜大学の正規の

授業科目である。4年制大学に編入を希望する学生や、観光に興味のある学生が参加するが、人数は多くはない。ゼミなどの集団単位で学生が自主的に企画申請し、目的に向かって実現させる、団体企画海外研修も、これまでに短大生が利用したプログラムの制度である。過去に2回の実施に留まるが、研修参加者は合計27名に上る。2018年度より協定校等主催短期研修にも参加者が出始めた。2019年度には、協定校となった韓国の大学との交流が盛んになった。協定校主催短期研修（短期留学）とは、大学が計画したプログラムを、協定契約を交わした海外の教育機関に対して広く研修生（留学生）を募集し、主催の大学が実施するものである。また、金沢星稜大学女子短期大学部は、規模が小さいため、これまでの海外研修や国際交流のすべてを、金沢星稜大学の制度の一部として活用している。

2-2 参加の人数と理由

近年の海外研修参加者を年度ごとにまとめた結果が表2である。研修先と参加者数を見ると、フィリピンのセブ島で行われるムーンショットアブロードが一番人気であることは毎年変わらない。しかし、そのほかについては、在籍学生の変化、行先や開催時期の変更、プログラムの増加などのためか、表面的には経年変化に特徴は見えない。また、2017年以降、毎年のように、夏休みに個人で短期留学や旅行を計画実行しているという学生も出始めた。留学先は韓国で、旅行先は、インドネシアやシンガポールなど、大学のプログラムで経験した目的地が多いと聞く。友人と韓国へ旅行する学生も増えているようだ。韓国は人気が高い。

学生が提出した志望理由書からは、「短大に入ったら一度は海外を経験しようと思っていた」、「英語など語学力を高めてコミュニケーションスキルを高めたい」、「自分を試す挑戦のチャンス」、「新しい自分を見つける」といった理由が多い。世間話として聞こえてくる理由には、「楽しそう」、「めったにない企画」、「友達と参加できる」、「どこかへ行きたかった」、「星短に入ったら、セブに行く決めていた」といった声が多い。特に短大生の場合は、「友達と連れ立って」という要素が垣間見える。

反対に、海外研修への否定的な理由には、行先の治安や衛生面での不安、経済的な理由も一部には存在する。特徴的なことに、いまだに、「海外は怖い」という気持ちがある。日本語が話せない状況が「怖い」、住み慣れた環境から出ることが「怖い」、行ったことのない場所に行くことを想像すると「怖い」といった様々な「怖さ」を感じている学生にとって、一步を踏み出すには、気分的な壁があるのかもしれない。国内でさえ長期間親元から離れた経験がないという学生も存在する。

海外などとんでもないという学生がいる一方で、一度滞在した都市やステイした家をもう一度訪ねたり、インドネシアが良い経験だったので、次はタイに出かける、といった行先を展開する学生もいる。海外旅行は、日常から大きく違った別の場所に身を置くので、それが、快感で一度味わうと病みつきになるといったこともあろう。また、先述のよう

に、別の自分が見え、そこで頑張れる自分や、苦境を乗り越えた自分に自信がもて、成長を実感する。その点では、初めての挑戦に対応できる自分を見出せない、いわば、食べず嫌いの克服には、一度経験をさせることが、重要となる。その対策として、経験者の声を聴かせることを実践してきた。

表 2：短期大学生の海外研修プログラム参加人数

年度	人数	研修先	プログラム
2014年度 47人	34	フィリピン	ムーンショットアブロード
	11	ロシア	ほしたび
	2	インドネシア	エリア・スタディーズ
2015年度 40人	37	フィリピン	ムーンショットアブロード
	3	インドネシア	エリア・スタディーズ
2016年度 70人	36	フィリピン	ムーンショットアブロード
	9	ロシア	ほしたび
	19	上海	ほしたび
2017年度 108人	6	インドネシア	エリア・スタディーズ
	58	フィリピン	ムーンショットアブロード
	19	上海	ほしたび
	9	アメリカ	エリア・スタディーズ
	2	オーストラリア	エリア・スタディーズ
	1	インドネシア	エリア・スタディーズ
	2	シンガポール	エリア・スタディーズ
	15	韓国	団体企画海外研修
2018年度 74人	1	タイ	短期海外実習
	40	フィリピン	ムーンショットアブロード
	12	ロシア	ほしたび
	2	カナダ	エリア・スタディーズ
	3	インドネシア	エリア・スタディーズ
	1	インドネシア	協定校主催海外研修
	12	韓国	団体企画海外研修
	3	タイ	短期海外実習
2019年度 73人 一部予定含	1	ロシア	短期海外実習
	47	フィリピン	ムーンショットアブロード
	7	上海	ほしたび
	4	カナダ	エリア・スタディーズ
	2	タイ	エリア・スタディーズ
	7	韓国	協定校主催海外研修
	6	オーストラリア	(予定)ゼミ研修

3 韓国の協定大学との交流実践

3-1 これまでの経緯

2019年は、日本と韓国の政治情勢が悪化した年であったが、金沢星稜大学短期大学部では、この年に韓国の学生との交流が盛んになった。2017年からの活動を振り返る。

2017年および2018年にゼミ生（短大2年次）が、情報化の進んだ韓国の教育現場を視察する目的で、団体企画海外研修を計画、実行した。日本のティーンエイジャーには韓国のエンターテインメントを好む傾向があり、本学学生もかねてより興味が高かった。一方、情報リテラシーの授業では、毎年、IT企業の代表を務める講師による、韓国の進化したデジタル社会や、近未来の社会についての講義がある。その講義がきっかけで、短大生が団体企画海外研修を利用して韓国へ飛び、小学校や大学、IT企業や日本資本の企業などを訪問した。

2018年の訪問先であるテリム大学校（韓国安養市、3年制の短期大学）から提携の話が起こり、2018年度の終わりには金沢星稜大学と調印し協定校となった。

テリム大学校は韓国の国費を利用した留学先に協定校である金沢星稜大学を選び、2019年7月に、12名の学生が金沢市に滞在して1か月間星稜のキャンパスで学んだ。さらに10月には、テリム大学校からの協定校主催プログラムとして、本学短期大学生7名がテリム大学校を訪問し友好を深めた。

3-2 2019年度留学生の受入

テリム大学校から金沢星稜大学への短期留学は、日本語の語学力の向上と日本文化の理解が目的であった。受け入れは、国際交流課が調整を行い、授業のコマ数の約半分を日本語学習の授業に充て、そのほかの時間には異文化理解や北陸地方の文化と歴史を体験から学ぶプログラムを用意した。短期大学部では、教員が多くの授業にテリム生を招き入れた。ゼミ活動や授業の一部で、ディスカッションなどの時にグループワークやペアワークで短期大学生と組み合わせた活動を行った。さらに、テリム生のための授業でも、サポート役として短期大学生からボランティアを募り、希望者10名程度が参加した。例えば、日本のビジネスシーンでのメールのやり取りの練習で、相手となった。また、自己紹介や挨拶の仕方など、短期大学生がすでに学習していることを、マンツーマンで教える実践をした。短期大学生はボランティアとして自主的に交流した。

留学生と席を共にした授業では、活発な留学生が率先して発言するなど、短期大学生をリードすることもあった。また、受け入れた授業担当者の全員が、留学生が授業に参加することで、短期大学生の意識が大きく変わったので、双方にとって良い効果が得られたと口をそろえた。テリム生は12名全員が志を高く持って来日し、非常にまじめに熱心に勉学に励んでいた。その姿に、短期大学生が日本語の部分で少しでも彼らの役に立ちたいという思いがあった。日ごろから、「外国は怖い」という気持ちがあっても、自分たちの授

業で留学生を助けてあげた、留学生のためにできることがあった、という気持ちが、外国人と話したい、交流したい、友達になりたい、という気持ちに変わっていったと短期大学生はいう。テリム生の学びとなり、短期大学生も刺激を受け、教員も目を見張るほど授業が活性化したのは、全員にとって良い経験といえる。

1ヶ月の間に通算23コマの授業で留学生の学習や交流の機会を受け持ち、短大1年生の全員、2年生の一部の学生と広く交流したことになる。自分から海外に行こうとしなかった短期大学生が、このような機会に留学生と数分でも交流することは、意識を変えることになる。

12名の留学生は、日本企業や日本での就職を視野に入れていた。秋の時点で複数名が、すでにその切符を手に入れている。星稜での研修も助けになったと思いたい。

3-3 星稜からテリム大学校への派遣

金沢星稜大学や短大部の学生は、大学が提供したプログラムや授業でのサポートのほかに、放課後や休日にも積極的に機会をもってテリム生と交流していた。夏休みに韓国旅行をして、テリム大学校に教員を尋ねた学生もいた。7月の留学中に相互の交流が進んだことで、テリム大学校から星稜に対して、テリム大学校への秋の短期研修が提案され、実現した。

星稜からは、7名の短期大学生が参加を志望した。その理由書によると全員が、7月に授業などで交流したことがきっかけであるを書いていた。中には、これがあったからこそ、これがなければ参加する気になっていなかったという学生もいた。折しも、日韓の政治情勢が良くない中、迷いもあったが、行ってみると懸念は払しょくされた。帰国後には「こんな時だったからこそ、余計に、行って自分の目で見て確かめることが大切だと気が付いた」という学生が少なくなかった。

今回の良好なリレーションは、双方が努力して時間をかけて回を重ねたことによる。また、海外に派遣することばかり考えて、学生に働きかけるのではなく、受け入れた留学生を大切に、双方の学生にとって良い交流となれば学生の海外への興味が自然な形で沸き起こるであろう。これは、海外に行けない学生にとっても非常に有効なことである。

4 参加者の自然増に向けて

これまで述べたように、海外経験においてビギナーである学生には、海外からの留学生として本学のキャンパスで学ぶ留学生が良い影響を与えてくれる。留学生自身も、星稜生との交流を希望しているので、今後は積極的に授業に招き入れようとする。そして、大学としては、受入体制を広げることが望ましい。学生が自国外に留学や研修として出るときは、自分の大学が休暇期間で、留学や研修先の大学が学期中であることが望ましい。各国、各大学の受け入れが可能な時期を検証して、規模を拡大することを提案する。

受入の問題として、日本語教育の手配と宿舎の準備が必要となる。スタッフを増やし、必要な経費を投入すれば、良い教育に近づくことは確かである。しかし、現状に照らせば、現在の教員は本来の教育分野に力を注ぐことが先決で、目の前の学生の教育が最も大切である。また、教職員の人数も増やせばよいという単純な問題ではない。日本語教育は、日本人学生には必要ではないことから、これまでの通り、外注で良いと考える。また、寮などの設備の充実には莫大な経費がかかることから、慎重にならざるを得ない。

これらの問題の解決に、石川県国際交流センターとの連携の検討を提案する。短期大学生に人気のムーンショットアブロードは、外部への委託であることから、効率よく大人数を毎年派遣できる⁽³⁾。近畿大学国際学部では、大学生を留学させるための英語教育の部分をアウトソーシングしている⁽⁴⁾。石川県国際交流センターのプログラムは、週間単位で実施しており、日本語教育とホストファミリーのマッチングを担当している。星稜大学が窓口となり、受け入れる留学生が、宿舎と日本語教育の部分で石川県国際交流センターのお世話になり、午後の授業や課外の活動で星稜のキャンパスで過ごすことが可能なら、課題が軽減されるのではないだろうか。

注釈・参考文献

- (1) 日比谷潤子「Unlearningをめざして―大学国際化の意義―」IDE現代の高等教育（2017）大学国際化の今，IDE大学協会誌，No.596，pp.4-9
- (2) 金沢星稜大学国際交流センター「Study Abroad Guidebook 2019」，金沢星稜大学2019年度海外留学ガイドブック，pp.15-24
- (3) フィリピンセブ島での短期語学研修プログラム星稜女子カムーンショットアブロード（2019），金沢星稜大学 金沢星稜大学女子短期大学部 進路支援課
- (4) 近畿大学国際学部 <https://kindai.jp/academics/international.html>（2019.10.31）

